
クロネコ 暁闇戦記-

恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロネコ 暁闇戦記 -

【Nコード】

N 2 4 6 7 P

【作者名】

恭

【あらすじ】

代々古くから存在する魔法ライト学園。

そこは現在：前代未聞の不可思議な事件に追い込まれていた。

精霊と魔法が存在するこの世界、フィスタント。

ヒトが生まれながらにして持っている魔力の分だけ精霊と契約ができる。

炎、水、風、地、雷、空間、治癒と光、そして闇が現段階で確認されている魔法の種類。

ヒトに魔法の種類があるように、精霊にもある。

話を戻し、魔法ライト学園に”精霊を食する魔物”が現れたのだ。
この世界、フィスタントでは数多くの魔物が存在している。
だが…精霊を獲物とする魔物は世界中のどこでも確認されていないか
った。

この物語りの主人公、黒沼氷くろぬまひょうは、魔法ライト学園にいるヒト、精霊
を守るべく己の正義のために立ち上がった。

「俺はきつと…この時の為に…」

世界中を揺るがす大事件に一人の若者がこの事件の真相を探ってい
く。

*作者の恭です。

分かり難い所、誤字や脱字がありましたら即お知らせ下さいますよ
うお願い致します。

*** 注意（前書き）**

グロテスクなシーンを描写する予定があるため、苦手な方は無理をせずに速やかにお引き取り願います。

* 注意

代々古くから存在する魔法ライト学園。そこは現在：前代未聞の不可思議な事件に追い込まれていた。

精霊と魔法が存在するこの世界、フィスタント。

ヒトが生まれながらにして持っている魔力の分だけ精霊と契約ができる。

炎、水、風、地、雷、空間、治癒と光、そして闇が現段階で確認されている魔法の種類。ヒトに魔法の種類があるように、精霊にもある。

話を戻し、魔法ライト学園に”精霊を食する魔物”が現れたのだ。この世界、フィスタントでは数多くの魔物が存在している。だが：精霊を獲物とする魔物は世界中のどこでも確認されていなかった。

この物語りの主人公、黒沼氷くろぬまひょうは、魔法ライト学園にいるヒト、精霊を守るべく己の正義のために立ち上がった。

「俺はきつと…この時の為に」

世界中を揺るがす大事件に一人の若者がこの事件の真相を探っていく。

* 作者の恭です。

分かり難い所、誤字や脱字がありましたら即お知らせ下さいますようお願い致します。

出発の準備 -

黒髪に金色の瞳。

俺は周りからクロネコと呼ばれている。

「クロネコお…本気、で行くのがよっ！」

涙目を俺に向けて泣きじゃくる男、名はヴィドールという。
彼とは幼少の頃から一緒に暮らしてきた友人だ。

「ああ…」

クロネコって嫌な響きだ…と思いながらヴィドールから目を背け、
荷造りを続ける。

「なら…っ！ クロネコが行くんだったら、…っ、俺も行く…！」

「却下だ」

このやり取りはもう何時間も続いていた。

…だが、荷造りはそろそろ終わる。

本当に、ヴィドールとはもう会えなくなるだろう…。

あいつも分かってるからこんなに必至に纏わりついてくるんだ。

「やだっ！ やだやだやだ…！」

駄々っ子の様に泣き喚くヴィドールを見ているのは辛い…。

俺もヴィドールと離れるのが寂しくない訳じゃないんだ。

ただ…

「だって…！　だってこんなによ…ぐっ、ぐるねこが！死に行くよ、ようなもんじゃ…っ」

危険な場所にこいつを連れて行けないんだ。

ヴィドールはぐしゃぐしゃの顔で悔しそうに拳を握った。

俺は荷造りが終わり、立ち上がってヴィドールを見る。

肌が白く、大きな目は青色で絹のようにさらさらの髪は金髪、それがヴィドールの見た目だ。

だが…何時間も泣き、目は充血して瞼も腫れ、通るように綺麗な声は枯れてしまい、唇を噛み締めて拳を握りしめる様はとても痛々しい…。

「ヴィドール…」

ヴィドールの震える拳をゆっくり解き、齒を口内にしまわせる。

「ヴィドール。はっきり言わせてもらう。…今回はお前を連れていけない。戦闘の邪魔だ」

「っ…。分かってんだって、そんなの俺が一番ね…」

「俺はヴィドールに、幸せに暮らし…」

「ざけんな！！ 勝手に俺の幸せを決めんなよっ！」 それぞれに違う幸せがある” んだろ？！ そう言ったお前が、俺の…お、おえの、幸せを…、」

すごい剣幕で怒鳴りつけるヴィドールに何も言い返す気にならず、俺はただ眉間に皺を寄せてヴィドールの言葉を聞いていた。

ヴィドールは自分を落ち着けるように一息吐くと口を開いた。

「……」

「俺の幸せは、お前と旅して、笑って、死ぬ時はお前の為か一緒に戦闘で…っ！こんなの、お前に会った時から一生…変わらない…」

思いをぶちまけて軽く肩で息をするヴィドールを、俺は霞む視界で見つめる。

ヴィドールの言葉は全身を稲妻が駆け巡るようになり効いた。

ヴィドールを置いてくなんて簡単だ。

だが…、簡単にこのデカい覚悟を潰してしまうのはとても気が引けたし最低なことだと思った。

…それに、ヴィドールだけじゃねえ。

「…、俺もだ！ばかやろお…」

なんとなく火照っているだろう顔を見られたくなくて、ヴィドールの顔を胸に押し付けた。

「氷っ！」

「…守ってやらねえからな」

「当然。俺が氷を守るんだっ！」

照れ隠しに言った言葉に、ヴィドールは笑って強気なことを返す。

「ふはっ！ そりゃー楽しみだ」

ヴィドールとまた一緒に居られる。

俺は心が嬉しさで満たされるのを感じた。

魔法ライト学園 クロネコの入学 -

ヴィドールの荷造りも終わり、俺達は目的地の魔法ライト学園へ行く直前だ。

「トリックワープ>空間<」

魔法詠唱して目を開くと、目の前には大きい門があった。

「ここが魔法ライト学園…」

「思ったよりでかいな」

トンッ！ トンッ！

「君たち。ここ、魔法ライト学園に何の用だ」

「同じく」

学園の大きさにヴィドールと呆然としてみると、門の付近にいたらしい門番2人に声を掛けられた。

一人は年寄りのお爺さん。

一人は気怠げに目を閉じた若手だ。

おい、若手の門番。

せめて目は開けた方がいい。

っ、…それともなんだ？何か開けられない理由でもあるのか？

この2人…会った時から魔力が全く感じなかった。

それ故に門番がいた事にも声を掛けられるまで気が付かなかった…。

まあ、魔力を感じさせないというのなら魔力制御という物を身につければ可能だ。

こいつ等は門番だし。

力を測られて奇襲されたなどでは堪らないだろう。

それを踏まえて魔力を感じさせない方が門番に効率が良い。

「入学を希望しております」

「っ希望しております」

俺に習ってヴィドールも慌てて御辞儀をした。

トンッ！ トンッ！

「ふむ。それぞれ名前、歳、属性、精霊を言え」

「同じく」

爺さん…話す前に杖を打ちつけるのは何だ？
もしかして突っ込みを求めている…？

胸に手を当てて一歩前進して頭を軽く下げる。

「我、名は黒沼 氷と申します。 歳は18。 属性は空間、精霊
はストレージです」

トンッ！ トンッ！

「下がれ。次」

「同じく」

チラリとヴィドールを盗み見る。

…特に門番2人に気を止めてなさそうだ。

なら俺も考えるのはやめておこつ。

軽く頭を下げて手を下ろし一歩後進すると、ヴィドールが前へ出た。

「我、名はヴィドールと申します。 歳は17。 属性は水、精霊はジャップです」

トンッ！ トンッ！

「下がれ。 ジョブ、黒沼殿と手合わせを」

手合わせ…！？

この2人は門番だけじゃなく…審査員も兼ねてるつつうことか？

「おな…承知致しました」

俺が考えていると若手の門番が初めて違う言葉を言った。

…いや、実にどうでもよいが。

「クロネコ！頑張れよっ！」

「ああ、さんきゅ」

トンッ！ トンッ！

「両者向き合って、……始め！」

戦いが始まった。

……おい、まじかよ。

俺と戦闘になっても、門番らしき奴は目を開けない。

それに仕掛けてくる気配もねえし…余裕ってことか？

（（ソード＞空間＜））

心の中で詠唱すると、淡く光りを放つ剣が俺の手に握られた。

爺さんが杖を打ちつける音と感心する声を聞き流しながら、若手の門番目掛けて駆ける。

「っ、」

曲がりのない直線的な俺の攻撃は相手が飛び退いたことで空振る。

「くっ、ふふ…楽しくなりそうだ」

久しぶりの強者に血が騒ぎ出す。

初めの一撃と比じゃない程素早く動く。

少しは本気で行くぜっ。

こいつは視力が無い代わりに聴力が凄まじい筈だ。

脳の視力の配分が聴力に注がれていると考えて間違いないだろうな。

息を殺し、俺の周りから音を消せば門番は確実に俺を見失う。

（（サウンイレース>空間<））

スツと俺と俺の周囲から音が消え、一瞬だが門番が動揺したのを見逃さない。

シュ…

「…やれやれ」

剣が喉に添えられたまま門番は言った。

「入学おめでとうございます」

魔法ライト学園 ヴィドールの入学 -

@ヴィドール side -

「おお！ クロネコおー！入学おめでとさーん！」

俺は距離があるクロネコに大きめの声量で賞賛の言葉を投げた。

「…おう！一足先に！」

……んう？

気のせいかも知れないけど、俺はクロネコに違和感を感じた。

クロネコは何かあっても顔や雰囲気じゃ分かりにくいし、戦闘の時はそれこそ比じゃないくらい表に出さない。

感情やら考えを読まれたら、”死ぬと思え”…らしい。

今の場合戦闘じゃないもののその直後だし…距離があるから俺の勘かもしれないけど……クロネコが何かを考えてる気がした。

ただの違和感からの考えにすぎないんだけど…。

クロネコが近づいて来た事で俺は思考を止めた。

すれ違う時にパチンとハイタッチをして俺は門番の所へ向かう。

トンッ！ トンッ！

「黒沼殿、合格だ。 次」

バクバク鳴る心臓に手を当てて深呼吸を繰り返す。

不安なんだ…。 入学出来るかな、って。

クロネコと旅をしていた時、俺はいつも守られていた。

戦っているクロネコの後ろ姿ばかりを見て、それが当然だった。

そう思ってたけど…そんなの当然じゃないんだ、って魔法ライト学園に行くことを決めた時にやっと気付いたんだ。

今はクロネコの前に立てなくてもいい。

せめて…横に並びたい。強くそう思った。

「…ヴィドール」

「ん？」

「…お前は強えよ！ お前自身が気がついてないだけだ！ ……頑張ってこい！」

クロネコが見透かしたようにそう言う。

自分の中で何かが弾けた気がした。

俺…、何怖じ気づいてんだっ！？

学園に入学出来なきゃ守るも糞もねえだろ！

…絶対に入学してやるよっ！

「クロネコ…！」

「なんだ…？」

「ちゃんと見とけよ！」

ふっと緩められたクロネコの微笑みに俺も笑う。

………ありがとう。

クロネコに心の中で言う。

門番の若い方に駆け寄る。

精神を戦闘に集中させた。

トンッ！ トンッ！

「始め！」

「雷と光の精霊ジャップ、我に力を貸してくれ！」

俺が唱えると光の粒が集って、そこから純白の虎が現れた。

ジャップの周りではビリビリと電気が弾く。

トンッ！ トンッ！

「ほう……。S級精霊のジャップか、美しい」

門番の爺さんの言葉に内心で頷く。

ジャップは俺と契約した雷と光の精霊だ。

その容姿はとても美しく、本とかにもよく載っていたりする。

何故俺と契約したかは分からないけど、ジャップにはいつも助けられているんだ。

「融合魔法、水霧>水<！」

ジャップの周りに霧状の水を放って弾く電気と合体させる。

水の周りを弾く電気はジャップをより美しくさせる。

「っらあ！」

戦闘が始まってからずっと俺の様子を見ていた若い門番に向け、ジャップの周りにある水と電気を放つ。

……っ！

…な、っ受け止めたあ！？

若い門番は避ける事もせず、そのまま俺の攻撃を食らった。

筈…なのだが、水は地面に滴り落ち電気は門番の体を弾いていたがやがて消えていく…。

「…ふう。　ヴィドール殿も入学おめでとうございます」

呆然としていて聞き逃しそうになったけど、はっきり聞き取れた。

「…にゅ、入学！！　ありがとうおジャップ

ッ…！！？！？」

さっきまでの疑問も考えられなくなる程舞い上がる。

考えることよりも入学出来たことの嬉しさを噛み締めたい。

そして俺は変なテンションでジャップに抱きついて感電して気を失いそうになった。

ヘライズと融合魔法 -

俺達は無事？に入学が出来た。

「ゴホッ。 いやー…いつもジャップの電気は痺れるなー」

ヴィドールは無事かどうかは曖昧だが…。

まあ、水属性のヴィドールが電気に強い抵抗力を身につけて来ているのは本当だし、良しとするか。

「ゴホッ ゴホッ」

そしてジャップは

” やれやれ…いい加減学習しろ ”

的な呆れ顔でヴィドールを見ている。

けど…その内側に優しさの温かみがあるのを俺とヴィドールは承知の上だ。

暫くするとジャップから光の粒が現れ、やがて消えた。

トンッ！ トンッ！

「改めて…黒沼 氷殿、ヴィドール殿、入学おめでとございます」

「同じく」

「ありがとうございます」

「ありがとうございますっ！」

トンッ！ トンッ！

「これはパンフレットだ。魔法ライト学園について分からないことがあれば見るとよい」

「同じく」

俺達は爺さんにパンフレットを手渡された。
それは分厚く、結構重みのある物だ。

…見る気はしないな。

「わかりました」

「はい！」

トンッ！ トンッ！

「それでだが…疑問に思う点がある筈だ。ジョブ、説明を」

「お…承知致しました」

っ、…説明するってか…？

確かに疑問が解決された訳じゃねえし嬉しいんだけど…。

わざわざ弱みを握らせる様な真似して、何か企んでやがるのか？

…まあ、先ずは聞いてみるか。

「では…黒沼殿。知りたいことがあれば聞いて下さい」

ブッ!!？

…俺が聞くのかっ。

てつきり門番が軽く説明して終了だと思った…。

「おーいクロネコ！ 何黙ってたんだ？」

「いや、ちょっとな…」

顔の前で手を振るヴィドールに苦笑いを返す。

「ん、そうだな…貴方達は魔法制御の物を身に着けているのですか？」

「いいえ、私は着けておりません。ですが…そちらの門番、ソテイ様は着けておられます」

迷いもせず答える門番。

俺は驚きながら頭を回転させる。

爺さんの方はあの杖が魔法制御であってるとるだろう。

わかんねえのは…若い方だな…。

魔法制御以外に魔力を感じさせない例か。
あるいは魔力が無くなる例か。
魔法制御じゃないつつうなら…。

これは只の俺の勘だが、…魔力が無くなるつつう方が怪しいと思ってる。

その例となるものが…不死の者、全身変化、ストーンアイ等。

知っているのはこれだけだが、他にもあるだろう。

そしてこのような人達をヘライズと呼ぶ。

俺は見たこともないから詳しくは知らないが…まあ、

不死の者は、魔力を無くす代わりに一生生きてられること。

全身変化は、魔力を無くす代わりに自分が思うなりたいモノに変化できること。

ストーンアイは、魔力を無くす代わりに自分が見たものを意志関係なく石に変えることだ。

……ん？

ちょ、ちよつと待て。

俺は…気付いてしまったかも知れない…。

若い門番が目を開けない理由として、妥当なものは…？

「っ、…ストーンアイ」

思わず声に出してしまう…。

「っ！？ それってヘライズの…！」

パチパチ…

「御名答、素晴らしいです。 あれだけのヒントで答えを出してし

まうとは…」

トンッ！ トンッ！

「ハッハッハ！！ 君たちに興味が湧いた！ 今度色んな話を聞かせてくれないか？」

笑い出した爺さんに、俺はぐつと眉間に皺を寄せた。

「どうして正体を知られたというのに笑っているのですか？」

トンッ！ トンッ！

「試していたんだ。洞察力と知識をな」

「自分の正体をかけてですか？ それにもう合格した筈ですが」

なんなんだこいつ等は…。

トンッ！ トンッ！

「ジョブ、今度こそすべての説明を……の前に、移動しないか？
ここで立ち話すよりも中に入って説明しよう」

ヴィドールとアイコンタクトをする。

ヴ どうする？

自 着いて行こう。

ヴ 把握！

「…わかりました。移動しましょう」

トンッ！ トンッ！

「では着いてきなさい」

ズドゴゴゴオオ…

重たそうな音を出して開く門。

「わぁーすげえ重そうっ」

ヴィドールの言葉に頷く。

トンッ！ トンッ！

「こっちだ」

門番の後についていき、学園の敷地内に入った。

…すごいっ

沢山の魔力の波動を感じる…。

俺達は学園に入っただけのすぐのところ、十階建てくらいの建物に入る。

トンッ！ トンッ！

「ここは門番の人達が暮らす家だ……おい！タドリックー！」

「タドリック？」

ヒトの名前か…？ と考えていると、一瞬で目の前にアクセサリーを沢山身に付けた長身の男が現れた。

「っ！？」

ヴィドールはかなり驚いている。

長身の男…ここが門番の家ならこいつも門番の一人だろう。

そして、こいつからも魔力を感じない。

…恐らくはそのジャラジャラのアクセサリーが魔力制御の効果を持つ物だからだろう。

トンッ！ トンッ！

「悪いんだが……今すぐ門に行ってくれ」

ジャラ

「報酬は」

こいつ等会話の前にトンジャラうるせえなっ！
しかも報酬とるのか！

トンッ！ トンッ！

「そうだな…あいつ等なんてどうじゃ？

爺さんが指を差す先を辿る。

「 なっ！！ 何で俺達を指してるんですかっ！！！」

「……」

ヴィドールが喚くのを聞きながら俺は爺さんを睨む。

トンッ！ トンッ！

「冗談だつて！ ハッハッハ！！」

ジャラ

「…了解」

俺達を見て頷いた後、アクセサリーの男は消えた。

「……ほほ本気にしてるっ！…！」

ヴィドールの焦る言葉が響く。

消える間際の男の目…あれは確かに本気だった。

トンッ！ トンッ！

「まあ大丈夫だろ」

「…理不尽」

もう一度睨みつけてから歩き出した爺さんを追う。

.....

トンッ！ トンッ！

「入れ」

「広いつ！ 豪華っ！！」

はしゃぎそうな程瞳をキラキラと輝かしているヴィドール。

ちなみに俺達が案内されたのは爺さんの部屋だ。

トンッ！ トンッ！

「座りなさい」

「…失礼します」

「わっ！ やべえ、フカフカすぎ！」

どうみても高級ソファーにそれぞれが座ると、話しを始める。

トンッ！ トンッ！

「ジョブ、すべての説明を」

「…承知致しました」

俺の向かいに腰掛けているのが爺さんで、ヴィドールの向かいに腰掛けてるのが若い門番だ。

「まず……それぞれの合格理由は知りたいですか？」

「知りたいっ！」

「っ、…」

いきなり立ち上がり挙手するヴィドールにソファアが波を打つ。
一緒にソファアに座っていた俺はいきなりの事にバランスを崩してしまった…。

「あ、悪い。 気になってさ、あーはは…」

「…別に」

すぐに落ち着いたヴィドールは俺に気付くと謝った。

「ではヴィドル殿。話しても大丈夫ですか？」

「はい！」

「精霊にランクがあるのを知っていますか？」

「はい」

「では…知っているかもしれませんが、S級ランクの精霊と契約する者はもちろん、遭遇する者すら極僅かしいのです」

「え、知らないっ！！ そうなんですかつ！？」

「はい。その点も含めてですが、ここからが重要です。ヴィドル殿は当たり前のように使用していましたが……精霊と、自分の魔法を融合させる事はとても難しい事なのです」

「っ！！」

「言葉を話せない精霊と意志疎通をし、どちらとも信頼し合ってる時に出来るのが精霊との融合魔法です」

「……」

「多くの者は精霊との意志疎通が壁で、出来る者は少ないのです。それにランクが上がる程気難しくなるのが精霊……。S級精霊と

の融合魔法が可能なヒトはほんの一握りしかないのです。」

「っ、……ジャップ」

門番の話しの途中で俯いて、ヴィドールは言った。

「……ありがとう」

涙を堪えて呟く言葉は喜びと感動に震えている。

俺は微笑ましい光景に心が温まるのを感じた。

……いつも戦闘になると弱気なヴィドールだが、少しずつ……今も心
の中で見守り続けているジャップのお陰で、確かなる勇気をつけて
いつている。

「これがヴィドール殿の合格理由です。黒沼殿の理由もお聞きし
ますか？」

「いや、俺は大丈夫です」

それよりも……

「貴方は、ヴィドールの融合魔法を正面から受け止めたにも関わらず、傷一つありませんでした…。どういふことですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467p/>

クロネコ 暁闇戦記-

2010年12月9日04時11分発行